おそ
衝撃は、海底から襲いかかった。

ほふ
ぎょぐん
せんけつ
わななく波動は大西洋を揺るがし、屠られた魚群が深海を鮮血に染め

ただなか
せんこう
こうてつ
くすんぜん きょうふ
その真っ只中を潜航する鋼鉄の船体も、転覆寸前の恐怖を味わっていた。

「なんだ、今の衝撃は!」

ひじょうとう
また
ふくかんちょう さけ
赤色非常灯が瞬く中、発令所で副艦長が叫ぶ。

しゅんこう
しんえい
ドイツ海軍二一式Uボート五八八は、竣工間もない新鋭潜水艦だ。

きょうじん
せんかく
ほう
つぶ
その強靭な船殻が、赤ん坊のような悲鳴を上げて潰れかけている。

ちょうおんいん
レシーバーを耳に当てていた聴音員は、真っ青な顔で振り返った。

いこうげき
「分かりません！ 爆雷攻撃にしては深度が深すぎます！」

きし
ぶしょ
ほうこく とど
みしみと船体が軋む中、発令所には各部署から悲鳴のような報告が届く。

ふつきゅう
「機関室です！ 推進機の出力六〇%に低下！ 手動で復旧作業中！」

きょじゅうくかく

しんす
はいすい
へいさ
「居住区画に浸水! 排水のため二区と四区を閉鎖します!」

もさ
副長は元より、乗組員たちは長年、海中での戦いに慣れた猛者たちだ。

にんむ
船体が潰れかけても、冷静に任務をこなし、生き残るだけの力はある。

むね
¥6
それでも彼らの胸には、いつもならば感じない不安が渦巻いていた。

きかん
のが
「敵艦はどこにいる? 航走音を聞き逃したのか?」

副長の問いに、聴音員はレシーバーをわずかに外して首を横に振った。

せき
しようかい き
「いえ、海面上に艦船は一隻もいません。もしかしたら対潜哨戒機かも…」

お
しょとう
われ
「馬鹿な。敵航空基地のあるアゾレス諸島はまだ遠い。 この海域は我らの海だぞ」

せっしょく
爆雷とも機雷の接触とも違う。それどころか、敵の気配すら感じられない。

きょうふ
あざわら
その恐怖を嘲笑うかのように、より強い衝撃がU五八八を襲った。

ごうおん
轟音をまともに耳にした聴音員が、悲鳴を上げて椅子から転落する。

「ぎゃああああっっ!」

こまく
聴音員が鼓膜から血を噴き出すと、副長はもがく彼を抱き起こした。

「しっかりしろ、俺が分かるか!」

「医務室には自分が運びます!」

こども

たお
まだ子供じみた水兵が、倒れた聴音員を運び出そうとした。

えりく
だが水兵の襟首はわしづかみにされ、強引に引き倒される。

あつけ
ほそおもて
呆気にとられた水兵と副長の前には、黒い制服を着た細面の男が立っていた。

「勝手に持ち場を離れてはならん! その聴音員もだ!」

かんだか
わか
たけだか
甲高い声の若い士官は、居丈高に副長を見下ろした。

きぐ
「さっさと今の衝撃の正体を探るのだ。 敵の攻撃かどうか確かめろ!」

「あ、あなたは正気でそう言っておられるのか!」

副長はなぜか、年若いはずの士官に慇懃な怒りを示した。
しめ

「彼は任務を果たしたのです。これ以上の責務を強いるのは無理だ!」

ちりょう
「ならばこの艦内に、彼の吸う空気はない。無論、治療の必要もだ」

ふおん
U五八八の発令所に、不穏な空気が走った。

こと
そしき
若い士官の着る黒い制服は、乗組員たちとは異なる組織のものだ。

ぶそうしんえいたい
きょうじょう てつてい
武装親衛隊。しかもナチスの教条を徹底的に叩き込まれた愚物。
ぐぶつ

しせん
親衛隊士官は、乗組員たちの冷たい視線も気にせず副長に詰め寄った。

「さっさと楽にしてやれ。 そうすれば残り僅かな食料の分け前が増える」

いつしょ

そんざい
「ずっと一緒に戦ってきた仲間です、家族以上の存在を殺せるものか」

かつか
かんかつか
「この艦は我々武装親衛隊の…いや閣下の管轄下にある。私が閣下の副官である以上、

ぜった
私の命令も絶対なのだ」

「……戦争がとっくに終わっているのにですか!」

にら
副長は、カレンダーの日付を睨んだ。一九四五年六月六日。

忌まわしい連合軍のノルマンディ上陸から、ちょうど一年だ。

ここく
しょう ど
すでに彼らの故国ドイツは、一か月前に敗北し焦土と化している。

きょうげき
そうとう
東からソ連軍に、西から米英連合軍に挟撃され、総統すら死んだ。

いま
と じょう
けんじゅう
だが未だ任務の途上にあるU五八八の艦内で、親衛隊士官は拳銃に手をかけた。

「任務が終わるまで命令は絶対だ・・・・・・ぐっ!」

言葉の途中で、親衛隊士官はだしぬけに苦悶の声を上げた。

くつきょう
うで
拳銃を抜こうとした手首は、誰かの屈強な腕にひねられている。

ちゅうさ
せいかん
振り向いた彼の前には、艦長・カルル・ロスバッハ海軍中佐の精悍な顔があった。

めい
「確かに我々は、閣下の命で戦っている。だが閣下も君も船乗りではない。ましてここは

だま
深海の戦場だ。黙って潜水艦乗りの言う事を聞いてもらおうか」

「は、放せ! この無礼を閣下に御報告申し上げるぞ!」

「なら勝手に行きたまえ。閣下ももうお目覚めのはずだ」

ほう
ロスバッハ艦長はぞんざいに手を放し、 親衛隊士官を放り出す。

んま
そして踵を返し、百戦錬磨のベテラン乗組員たちに振り返った。

せんとうけいかい
「水兵、彼を医務室へ。 副長、聴音員に代われ。 戦闘警戒、速力上げ」

ぜん
にん
俄然、乗組員たちが任務に立ち向かい、 発令所が息を吹き返す。

ぐんぼう
まぶか
ロスバッハはおもむろに艦長の椅子に座し、軍帽を目深にした。

この艦は彼の手足であり、乗組員は彼の子供たちであった。

たとえ親衛隊であろうと、よそ者の自由にさせてたまるか。

そんな視線から親衛隊士官が逃げるように去ると、副長がレシーバーを握った。

こうげき
「艦長、連合軍の攻撃でしょうか?」

「いや……攻撃というより、海底火山の噴火に思えたな」

もっともそんな音、一度も聞いた事はないが。ロスバッハはそう続ける。

ぐん
これから通過するアゾレス諸島こそ、大西洋唯一の火山島群なのだが・

「方位と深度、出ました。 近いです」

ほうこく
まゆね
ようやく副長の報告を手にして、ロスバッハは眉根を寄せた。

ふじょう
「近いどころではないぞ。それに・・・・・・馬鹿な!浮上しているだと?」

しょうげきは
こくいつこく
ソナーが察知した衝撃波の発信源は、刻一刻と位置を変えていた。

おくそこ
深海の奥底から、U五八八の深度へ。そして海面へ。

ロスバッハは、自ら聴麓レシーバーに耳をすませた。未だ多くの水中雑識。

まがまが
ほうこう
しゅんどう
しかしその雑音をかき分け、禍々しい咆哮めいた何かが蠢動している。

せんぼうきょう
じょうしょう
「副長、潜望鏡深度まで上昇する」

「今、浮上するのでありますか?」

かいちゆう
怪訝そうな顔の副長は、懐中時計を見やって顔を寄せた。

「もう夜が明けております。たとえ今の衝撃波が連合軍の攻撃でなくとも、どこかの国の艦船か航空機に目視で発見される恐れは十分にありますが」

んすい
きれつ
かくにん
「浸水はないが、今の衝撃波で船体に亀裂が生じたかもしれん。 確認したい」

われ
きみつ
「それに我々は機密任務の途上にあります」

だんこ
断固とした艦長に、やや声をひそめて副長は警告した。

とど
「閣下を目的地に送り届けるまで、いかなる相手に発見されてもならないのでは?」

ぶしょうひげ
閣下か............ロスバッハは、苦々しげに無精髭を撫でた。

ごそう
たった一人を護送する。それがU五八八最後の任務であった。

はいぼう
その男を敗亡したドイツから逃すために、 U五八八の戦争はまだ続いているのだ。

そしてその男は、未だU五八八に目的地を教えてはくれないでいた。

かいいき
えんえん
「副長、目的地とはどこだ? すでに一週間も、この海域を延々と周回させられている。閣下の御命令でな。 しかしここは大西洋の只中だ。上陸できる土地など絶無だ」

正気の者が発する命令なら、ロスバッハとて従うのに躊躇はない。

かつか
だんげん
しかし、閣下が正気だと誰が断言できるだろうか。

閣下は、ただ一言命じたのだ。約束の地へ行くと。

そんしょう
きけん
「船体の損傷を調べず航行を続ける事は危険である。 潜望鏡深度だ、副長」

ふくざつ
か
たた
ロスバッハは軍帽の位置を直し、複雑な顔の副長の肩を叩いた。

「心配そうな顔をするな。 この艦が沈んでは、閣下も目的地まで行けはしない」

しゅんかん
24
くつおと ひび
そう言った瞬間、ロスバッハの真後ろで固い靴音が響いた。

「もちろんだよ、艦長。 私は君の意見に同意する」

振り返ったロスバッハの前で、軍服姿の男が芝居じみた声で両手を広げた。

しょくん。
くら
のル
こども
「おはよう、諸君。 先ほどの衝撃に比べたら、ソ連軍多連装ロケット発射器など子供の目

さっそく
じょうきょう
覚ましに思えるね。 早速、状況を確認したまえ」

ふつう
こくぼうぐん
きかん
せいふく
四〇代半ばの肉体にまとっているのは、ごく普通の国防軍歩兵佐官の制服だ。

しめ
だがもちろん、彼自身の本当の身分を示す服装ではない。

きか
だっしゅっ
かく

燃え盛るベルリンから脱出する際、正体を隠すため死体から引き剥がしたものだろう。

さいのう
彼にはそうするだけの理由があり、また脱出を成功させるだけの才能があった。

ひんきやく
たび
せすじ
その賓客の才能を思う度、ロスバッハ艦長は背筋に言いしれぬ悪寒を感じる。

どうしてあなただけがここまで逃げ延びたのだ?

ほうじゅ
せんすい
ほぼく
傍受した連合国のラジオ放送は、ゲーリング国家元帥やヒムラー親衛隊長官の捕縛を伝

えている。 ゲッベルス宣伝相は、自分の子供たちを毒殺した後、 焼身自殺したと聞く。

そうとう

と

統とて同様に死の床に就いたはずだ。 そしてあなたも、総統の死を看取った。

なのにどうしてあなただけが生き残る事ができたのだ?

びしょう

そう考えるロスバッハの背中に、 賓客の微笑が向けられた。

「私には才能があるのだよ、艦長」

きんちょう

こた

緊張を押し隠すロスパッハに、賓客は冷たい笑みで応えてみせた。

かいひ

「危険を察知し、危険を回避し、危険を自分の味方につける才能がね。だからこそあのベルリンから生きて出られた。 その才能が私に告げているのだ。 今、浮上すべきだとね」

「副官のグライナー中尉からは、衝撃波の正体をつかめとの指示が・・・

つたいゆうせん。<div>

「彼の指示より私の命令が絶対優先だ。浮上すれば全て分かるだろう」</div>

「では危険はないとおっしゃるのですか?」

ゆうぜん
あし
ロスバッハが問うと、賓客は悠然と首を振り脚を組み直した。

せま
「いや、危険だ。とてつもない危険が迫っている。 私には分かるんだ」

「では浮上は......」

「言ったはずだよ、艦長。 危険さえ味方につけてこそ、生き残れると」

かがや そうぼう
賓客の声は次第に熱を帯び、その輝く双眸には悪しき知性があった。

「無力な者を味方につけても勝てはしない。私に必要なのは、危険でも力ある者だ。
それが見分けられたからこそ、私は総統地下壕からここまで生き延びたのだ」

副長が、 十分な偵察深度に達した事を告げた。

さく
海面状況を探るべく、ロスバッハは潜望鏡に向き直る。

むか
じゅんぱく お

だが夜明けを迎えたはずの大西洋は、ただ純白に覆われていた。

うむ
「濃霧だな。 ずいぶんと濃い・・・・・・」
J

しかい
潜望鏡を動かしつつ、ロスバッハは真っ白い視界に目をこらす。

しょうげき
あれほどの衝撃があったのに、海面は不思議と穏やかだ。

ふか
発信源も海面近くにあるはず。そう思った時、濃霧の奥深くから黒い影が迫り出した。

きょうがく
馬鹿な・・・馬鹿な・・・・・・馬鹿なロスバッハは何度も驚愕する。

「・・・・・・島ではないか」

きょうこう
かんせん
その恐慌は、発令所にも感染した。 誰もが、見える島などないと知っていたからだ。

うつ

だが前方一キロ、ロスバッハの目に映るのは、黒々と濡れ光る岩だらけの島だ。

だんがい
つるぎ
切り立った断崖で囲まれ、剣めいた岩山が重なり合う奇観。

明らかについ最近まで、海底にあったとしか思えない姿だ。

ぎょうし
さらにその島を凝視していたロスバッハの口が、震えるように声を絞り出した。

がん
彼の視線は、岩山の間に見え隠れする方形の岩塊をとらえていた。

つぶ
じんや
けんちくぶつ
半ば崩れ、半ば潰れてはいても、四角い岩石は明らかに人為的な建築物ではないか。

みじん
いよう
そして考古学など微塵も知らぬロスパッハにも、その建築様式の異様さは感じとれた。

じゃあく
目の前に浮かぶ遺跡はいかなる既知の文明にも似ず、何より邪悪に思えたのだ。

こんちょう
「見せてくれたまえ、艦長」

せんぼうきょう ゆず
れいしょう
ロスバッハが潜望鏡を譲ると、 賓客は満足げな冷笑を浮かべた。

こきゅう
そして深く、大きな呼吸を両肩で吐く。

「艦長、上陸の用意を」

むね
言って、 賓客は胸の前で十字を切った。

せん
賓客の言葉を、ロスバッハは呆然と聞いていた。

たみ
せつるつ
約束の地に行くはずだったユダヤの民を、絶滅せんとしたのはあなたではないか。

ならばあなたが言う約束の地とはどこなのだ。 あなたに約束した神とは誰なのだ。

ひど

か
ロスバッハは酷い悪寒をこらえて、艦内時計を見た。

じょうだん
なんて悪い冗談だろう。 六月六日午前六時。

せいしょ
ろく
けもの
新約聖書 ヨハネ黙示録第十三章に記された獣の数字。

おきな むすめ
ロスバッハは、日曜学校でそれを習った幼い娘たちに思いを馳せた。

あの子たちは、無事に暮らしているだろうか。

そして自分は無事、娘たちに会えるだろうか。

きょうふ
じょう
不安と恐怖に包まれたまま、 U五八八は濃霧の海に浮上を開始した。

chapter 1

「誰にも見られなかっただろうな?」

問われて、 部屋に入ってきた男は不動の姿勢を取った。

びこう
けいせき
「いつもどおりタクシーとモノレールを乗り継ぎました。尾行された形跡はありません」

セーフハウス
ふくす

「いつもどおり過ぎてもいかん。 この隠れ家へ来るコースは複数用意しろ」

うらどお
いつけんや
裏通り。 目立たない一軒家では、五人の白人がくつろいでいた。

ふくそう
がんこう
するど
みな地味な服装だが、眼光は鋭く、体格もがっしりしている。

まど
首魁らしい男は用心深げに、窓のカーテンをわずかに開いた。

でき
「我々の敵は、気配を消すぐらいなんでもないからな」

どくとく
けいじょう
窓の外には、都会のイルミネーションと独特な形状のオペラハウスが見えた。

むか
二〇二〇年のシドニーは、暑い新年を迎えたばかりである。

ここち
海風は心地よく吹くが、首魁は窓を開けようとしなかった。

そろ
「では全員揃ったところで、本部からの指令を伝えよう」

首魁が、書類をテーブルに並べていく。

あんど
一同の間からは、安堵を含むざわめきが漏れた。

「そりゃありがたい。 ようやくオーストラリアを出られますか」

がた
「ドイツ人にとって、この暑さは耐え難いですからな」

しょうじゅう かか
うごめ
しょう
自動小銃を掲げた男は、顔の傷をかせて微笑した。

にん
「それで次の任地はどこですか?」

「場所は東京・・・・・・だが誘拐するのは日本人ではない。我々と同じ白人だ」

地図や航空券に混じって、十数枚の写真が取り出された。

くちぶえ
みな同一人物を隠し撮りしたもの。銃を提げた男が口笛を吹いた。

「ほお、こりゃあ・・・・

言いかけた時、ドアが軽くノックされた。 合図とおり、三回ノックが二度。

「どうした、フリッツ?」

呼んだ名前は、ドアの外にいるはずの見張り役。

かぎ
しゅんかん
じゅうだん とびら
だがドアの鍵がカチリと開いた瞬間、無数の銃弾が扉をぶち抜いた。

からだ
お
たお
身体中に銃撃を受けた男は、血潮を撒いて真後ろに倒れる。

くだ
しゃげき
おそ
同時に、窓ガラスが砕け散り、さらなる射撃が室内の男を襲った。

ほんのり
のうてん
自動小銃の男は反応する事もできず、脳天を撃ち抜かれる。

わずか数秒間で、ドイツ人たちは一人残らず血だるまと化していた。

「アスカロン3、 成功」

リア
「アスカロン8、成功」

しんにゅう
せんとう
足音も立てず侵入してきたのは、黒い戦闘服の男……八人が姿を見せた。

ぼう
かくにん
死亡を確認し、所持品を調べる動作は恐ろしく機敏。 殺人に慣れている。

サイレンサー
手にしているのは消音器付きMP七SD九短機関銃。

しょうじゅんそうち そな
顔まですっぽりと覆うヘルメットは、自動照準装置も備えていた。

トップキック
「アスカロン・リーダーから先任下士官へ。全目標の殺害を確認。 損害なし。これから関

おうしゅう
係書類を押収する。 引き続き、一帯の封鎖を続けろ」

こうとう
指揮官らしいその男は、口元に伸びた喉頭式マイクに告げる。

すると部下の一人が、書類をかき集めてうなずいた。

「全部揃ってます。航空券の行き先は東京。奴ら今度は、日本で誘拐するつもりですな」

けんめ
「今年に入って三作目だ。奴らの計画にもキリがない」

せんけつ
よご
鮮血に汚れたそれを拾い上げ、指揮官は目をこらした。

「この娘は............!」

声には、まさかという思い。だが何枚めくっても、写真は同じ人物ばかりだ。

ないよう
きんちょう
指揮官は、書類の内容を確認すると、普段見せない緊張を見せた。

いどころ
「なぜ生きていると気づいた······一二年も居所を隠してきたのに......なぜ......」

はんのう
その言葉に、副官だけが反応する。

するとこの娘が例の・

われわれ
わす
「ああ。
々も忘れていたし、奴らも忘れていると思った」

しょう
「ハドレー少佐ああっっ!」

とつぜん
突然、指揮官は本来の名前で呼ばれた。それも悲鳴で。

けんぶん
叫んだのは、死体を検分していた一人だ。

りょううで
だれ
つめ、
わななくその男の両腕に、誰かの爪が喰い込んでいた。

それはたった今撃たれたはずの、首魁の爪だったのだ。

じゃま
「・・・・・・邪魔は・・・・・・させぬぞ.....」

身を起こした首魁は、ハドレー少佐と呼ばれた指揮官を睨んだ。
にら

ひだり
しんけいせん

だがその左目は、神経繊維によって眼窩からぶら下がっているではないか。

ふくぶ
きずぐち
ぞう ふ
腹部からは鮮血が流れ、傷口からピンク色の臓腑もはみ出ていた。

それでも首魁は立ち上がっている。 笑っている。 意志があるのだ。

とら
さらに悲鳴にもかまわず、捕えた腕を黒い兵士の身体から引きちぎる。

人間とも思えぬ生命力を見せつけて、男はハドレー少佐へと突進した。

「我らは約束の地に行くのだ!」

きょう
みじん
だがハドレー少佐の顔に、 恐怖など微塵もなかった。

けんじゅう
腰から引き抜いたのは、ベルギー製五・七ミリ自動拳銃FN五七。

なめ
しかも左右の腰から二丁。 滑らかな動きで照準する。

「お前たちに約束の地などない」

しゅかい
間近に迫った首めがけ、左右の銃が同時に吼えた。

のうてん
正確無比な射撃が、首魁の脳天にめり込み、 突き抜ける。

のうしよう
かざわ
たた
脳漿を撒いた首魁は、壁際に叩きつけられ、崩れ落ちた。

「指揮を執っていたのは、やはり不死者か」

じょう
ただよ
死体の頭部から、なぜか白い蒸気が漂い始める。

もう動かない首魁を見下ろして、 少佐は冷静に言った。

めい
「我々ジーゲン機関の敵は人間ではない。それを肝に銘じておくんだ」

腕をもがれた部下は、他の者によって慌ただしく運び出されていく。

その様子を苦々しく見送りながら、少佐は口元を結んだ。

れんらく
あきら
「東京と連絡をつけろ。 これで諦める奴らではない」

「日本に行くのですか? しかしこの娘には確か......」

副官が言いかけると、 ハドレー少佐はうなずいた。

「ああ、この地球上で最も頼もしい護衛がついている。だがな......」

確かめたい事がある。 そう告げた少佐は、首魁の死体をつま先で転がした。

弾みでポケットから転がり出たバッジを、さらに踏みにじる。

早朝の上野公園は、六月らしい湿っぽい大気に覆われていた。

ひとかげ
金曜日の午前六時では、辺りにまだ人影もない。

いやたった一人、 この暑さの中、黒いジョギングウェアで全身を覆った者がいる。

頭にはフードまでかぶり、素足で木立の中に身を置いていた。

はんぜん
きんせい
人相は判然としない。長身。均整のとれた肉体。

みよう
その両腕を悠然と持ち上げ······奇妙にねじった。

何かをこねるように手首を回し、腰を落とし、上体もひねる。

ゆうび
見とれるほど優美な動きに、 観察者たちは声をひそめた。

「間違いありません、 この前の奴です」

たいきょくけん
「顔は見えませんが、動きは同じです。 太極拳だと思いますが」

ぶあつ からだ
五、六人の観察者たちは、みな分厚い身体を持っている。

精悍な肉体を包むシャツの背には、一様にグラディエーターズの文字。

はいご ひか

きょうぼう
きょかん
だが彼らの背後に控えていたのは、精悍どころか凶暴にも見える巨漢だった。

たけ
ざんにん
背丈は一九五センチ。吊り上がった目で、残忍な笑みを浮かべる。

れいぞうこ
大型冷蔵庫めいた巨漢は、周囲の男たちを押し退けた。

いた
「あれだって十分、人を殺せる力はあるんだ。舐めたおかげで痛い目に遭ったな」

「そりゃあ、悪いのは俺たちかもしれません」

一人の男が、 何か脅えるような声で言った。

「酔ったあげくにあの男にからんだのは確かです。 しかし......」

「しかし何も不忍池に叩き込む事はないだろうと。 そう言いてえのか」

とうはつ
びしょう
頭髪を短く刈り込んだ巨漢は、不敵に微笑する。

しゅんかん
そして次の瞬間、間近にいた男の襟を引き寄せ、宙に浮かせた。

「言い訳は許さねえぜ。 お前たちも新人とはいえプロだ」

おす
「押、押忍っ!」

かんばん
「ましてグラディエーターズの看板を着てるんだ。 早朝だから良かったようなものの、

だんたい
めんぼく
まるつぶ
かの目についてみろ。 団体の面目は丸潰れだ」

でら
「申し訳ありません、小寺さん!」

した
名前を呼ばれた巨漢は、震える男たちに舌打ちする。

しつこく
小寺が目を向ければ、漆黒の男はまだ優美な運動を繰り返していた。

きんにく
うごめ
筋肉がみしみしと蠢くのを聞き、男たちも息を呑んだ。

「では本当に.....

「悪いのはお前たちだぜ。 あの男の凄さを俺に聞かせたんだから」

くつしん
腕を回す。 屈伸する。 小寺の動作ひとつひとつが風を震わせる。

漆黒の男を見据えて、巨漢はにたりと笑った。

「指一本触れずにお前ら二〇人を投げた男だ。 喰いたくもなるぜ」

あら
「あまり手荒にすると、 それこそ団体の......」

木立の中ではまだ、漆黒の男が何かを練っていた。

みひら
静かに突き出した掌を、そっと大木に押し当てる。

ぶとう
そして静止。舞踏にも思える動作に、 小寺は歩み寄った。

「なあ、あんた」

だが漆黒の人物は、答えるどころか振り向きもしない。

大木と会話でもしているかのように、たたずむだけだ。

「あんたに話が・・・・・

言いながら小寺は腕を伸ばす。だが彼の手は、 なぜか空をつかんでいた。

いつの間にか漆黒の男は、わずかに身体をずらし、腕の外側にいる。

きんきょり
いつさい
そんな馬鹿な。この至近距離で。動きなど一切見えない。

わかで
ひようじよう
後から駆けつけた若手たちも、表情を引きつらせている。

「何か用か?」

フードをかぶった声は、まだ少年のものである。

とちゅう

「俺、トレーニングの途中なんだけど」

きた
大木と向き合う事で、いったい何を鍛えているのか。

いだ
不可解さを抱きながら、 小寺は名乗りを上げた。

「俺たちはグラディエーターズ覚えてるよな、うちの若い奴ら」

巨漢の問いに、少年は小さくうなずいた。

究極格闘技は、世界で最も人気の高い格闘技である。

こうげ
かこく
噛みつき、金的への攻撃、 目潰し以外は何でもありの、過酷な格闘技だ。

グラディエーターズは、その選手を無数に抱える屈指のメジャー団体なのだ。

しゅつ
マスコミに露出も多く、打撃と関節技に精通していると誰もが知っている。

どうよう
だが少年に動揺はない。 小寺はそれが気にくわなかった。

「聞けばあんた、こいつらを池に叩き込んだそうだな」

「酔いを醒ましてやっただけだ」

UM
「なるほどな。だが勘違いは困るぜ。 こいつらは試合にも出られない新人だ」

こぶし
そして小寺は、拳を組んだ。

あなど
「団体の実力を侮られちゃたまらんぜ。 だから俺がそれを見せに来たのよ」

「そんな事、 する必要ないだろ」

ふいちょう
「あるさ。 うちの団体が弱いとか、あんたに吹聴されると面目が立たねえ」

小寺は、さらに間合いを詰めた。

「新人ごときを投げ飛ばして、いい気になるなと言いたいのさ」

だが少年は臆する気配も見せず、 息を吐く

そして思いも寄らぬ言葉を口にした。

かくとうぎ
「格闘技ごっこを負かしても、いい気にはなれないな」

ごうぜん
っ気なく言う少年に、小寺は傲然となった。

かた
におうぞう
盛り上がった肩の肉が震え、 仁王像めいて見える。

小寺は激怒を剥き出して、 少年に詰め寄った。

しんけん
「ごっこじゃねえ・・・真剣勝負だ」

声に、格闘者のプライドが込められている。

ひてい
究極格闘技こそ最強。 その自負が、少年の言葉を否定する。

「本気の潰し合いだ。 ごっこなんて言葉は許さねえ」

めんどう
少年は、面倒そうにつぶやいた。

「ただ、俺にはそう見えるんだよ」

おそ
小寺は、恐れを知らぬ少年の前で太い首を回し始めた。

きんにく
筋肉がごりごりと動き、関節が軋むような音を立てる。

感情は怒りを通り越し、 殺気に変わっていた。

かんばん
「見物人はいない。 それにグラディエーターズの看板着てるんだ。 練習と思うだろ」

小寺が、じりっと間合いを詰め

熱くたぎる殺気。 かつて、それだけで腰を抜かす者もいた。

たいど
せつきん
それでも少年が態度を変えないと、巨漢はさらに接近した。

そう
「俺の名前は、小寺惣二」

巨漢にしてみれば、それは降伏する最後のチャンスであった。

からだ
なぐ
すがた
いくど
相手の身体にまたがり、血だるまになるまでる姿は幾度もテレビ放送されている。

その名を聞けば泣いて許しを請うだろう、と思ったのだ。

しかし少年は真面目な声で、首を傾げるだけだった。

「知らないな。強いのかい?」

その言葉を受けて、 小寺の身体から熱気がほとばしった。

こうまで言われて、手加減をする格闘者はいない。

ただ
「じゃ済まねえよ、あんた......!..
T-

ていど
044
くいたぶる程度ではなく、本気で潰す気になった。

いっしゅん
少年の腕を取り、一瞬でへし折る。 そのつもりだったが......

ぎいつ......!
-」

悲鳴を漏らしたのは、小寺の方であった。

ひどう
しかも少年を目前にしたまま、微動だにできずにいる。

わか
あつけ
若手たちが呆気にとられる中、少年は静かに告げた。

「割るぜ」

もんぜつ
悶絶する小寺を見上げ、冷ややかに言う。

「少しでも動いたら」

見れば、少年のつま先が小寺の右足を踏みつけていた。

がた
とっしん

がむ音。信じ難い力が巨漢の突進をくい止めている。

こう
足の指を折るのではない。 足の甲を割ると言っているのだ。

あし
げきつう
あた
しかも少年の脚は、身動きできぬほどの激痛を小寺に与えている。

たんれん
こくふく
鍛錬では克服できない、人体の急所を知っているのか。

「こいつ!」

じんじょう
だが小寺の肉体も尋常ではない

いた
無数の痛みを経験した身体が、激痛を乗り越えたのだ。

こぼし
少年も今は動けないはず。そう見た小寺が拳を打ち込もうとして......

「なあ、もう止めようぜ。俺、こういう面倒は嫌いなんだ」

またしても少年は、放った拳の外側にいるではないか。

そして小寺の拳を、難なく受け止めている。 息がかかるほどの間近で。

「てめえ、シロウトじゃねえな いったいいいいっつ

少年が足に本気を込めたようだ。 小寺ももはや微動だにできない。

ふる
さらに受け止められた拳も、ぶるぶると痛みに震えている。

お
巌のような小寺の拳を、 少年が握り潰しているのだ。

見守る若手たちも、助けに入るべきか迷っていた。

かわ
ほく
するとどこからか、乾いた声と拍手が割って入った。

こう
「なるほど、甲利をねえ

あらわ

現れたのは、小柄な男だった。

しょうひげ
くたびれたトレーニングウェアを穿き、無精髭だらけの顔。

りゅうりゅう
くら
ふうさい
隆々たる体格の小寺に比べれば、風采が上がらぬようにも見える。

せすじ
しかし彼が現れた瞬間、若手たちの背筋が音を立てて伸びきった。

「......お、親父さん!」 父さん!」

「惣二、 よく頑張ってるな。 そこを踏まれながら、拳を出せる奴はまずいない」

きよかん
やさ
身動きできない巨漢に、男は優しく微笑んだ。

「さすが俺が鍛えた次代のエースだ。 グラディエーターズもしばらく安泰だな」
あんたい

じゅうじゅつ

「東洋医学ではツボ、柔術では殺点と呼ばれる部位は無数にある」

しつこく

せん

続いて男は、漆黒の少年に視線を向けた。

ねぶ

値踏みするように、その全身を隈なく観察する。

たし

「君が踏みつけているのはまさに一点だね。確かにシロウトではない。しかし初めて見た

げんじつ

よ。その殺点を今の間合いで、現実に押さえ込む男がいるとはな」

とたん

ゆる

くす

途端に少年は足の力を緩めた。小寺が地に崩れる。

めいし

現れた男は少年に歩み寄り、名刺を差し出した。

「私は末永 彼らのコーチをしている者でね」

いたわ
小寺の呻き声を聞きながら、末永は労りの視線を向けた。

「迷惑をかけて申し訳なかった。私からもお詫びするよ」

だが少年に、名刺を受け取るつもりはないらしい。

ふんど
その不遜な態度に、小寺は再び身を起こしかけた。

「お、親父さん、こいつは俺たちの事を……」

「惣二、もういいんだ」

ちんもく
もういい。末永が名刺を引っ込めると、巨漢も沈黙した。

だんたい
しゃぎい
うかが
「後で団体からも正式に謝罪にお伺いしよう。君、名前は……」

「いや……………俺、もう行っていいかな」

「できれば、もう一分ほど話がしたいんだがね」

すて
こと
かんじょう
謝罪する姿は低姿勢だが、コーチの声には謝罪とは異なる感情が見え始めた。

し
その視線で、少年を探るように見つめる。

「いったいどんな古武道を習ってるんだね」

いさば
きんきより

「隠さなくてもいい。私も体捌き程度なら習った事がある。もっともあの至近距離で、まして二の一撃をかわすなんて真似はできないがね」

末永は、どこか嬉しそうに言葉を続けた。

くつ
じつせん
「殺点だって、理屈を知る者は大勢いる。だが苦もなく実践できる者は達人だけだ。それだけ鍛えてるなら……うちでも通用するだろうね」

ぎょうてん
思いがけぬ言葉に、小寺たちが仰天した。

こうかつ
ろうかい
末永の笑みに、狡猾さが加わっている。そして老獪さも。

彼もまた、何か武術を修めた男なのか。誘う視線に隙はなかった。

ねら
「私の目に間違いがなければ、世界も狙えるぞ」

わかて
小寺も若手も、すでに呼吸すら忘れていた。

そしつ
末永は、たった数分間見ただけの男に、彼の素質を見抜いたのだ。

そして誰もが末永の眼力を知っている。強さを見抜ける男なのだ。

むぞうき
しかし少年は、腕時計をちらりと見ただけで、無造作に身を退いた。

「もう一分経っただろ。じゃあこれで」

ぼうぜん
走り出す少年に、今度は末永が呆然とした。

「お、おい…………待ってくれ、君!」

みじん
だが少年の足は止まらない。未練も微塵もない。

慌ててコーチが追いすがろうとした時だった。

「何様のつもりだ!」

とつぜん
突然、小寺が吼えた。思わず少年も歩みを止める。

ふんまん
小寺の顔面には、真っ赤な憤懣がにじんでいた。

かねもう
かっこう
「大昔の武道家じゃあるめえし、自分の力を金儲けに使いたくないってか。格好つけや

って……………そこまで俺たちを虚仮にするか!」

「けどな、俺は恥じねえぜ。鍛えて、強くなって、金を稼ぐ。それのどこが悪いんだ!」

小寺の問いかけに、ゆっくり少年も振り返った。

しゅんかん
瞬間、小寺の、そして若手たちの背筋に悪寒が走る。

のぞ
フードから覗く少年の眼光が鋭利な刃のように光ったのだ。

反射的に後ずさる一同に、少年は頭を覆うフードを撥ね上げた。

「俺だって、金は欲しい」

そで
さつばつ
じゅうにお
ただよ
ジョギングウェアの袖をめくる。途端に、殺伐とした野獣の匂いが漂った。

きんにく
ごと

あと
剥き出された腕は、筋肉の束の如し。そして皮膚には無数の傷痕があった。

こんせき
切り傷、火傷、打ち身の痕跡。そして小さな円形の傷は.....
・・・・・・

「い、いったいどこで……その傷は……」

震える小寺の目前で、少年は手首のサポーターを巻き直した。

その内には、ずしりとした重りが仕込まれているではないか。

おそ
恐らく左右の腕に五キロずつ。それであれだけの動きができるとは。

さらに足首にも同じ重りが全てを晒け出し、少年はつぶやいた。

「けど、もっと大事なものがある」

その言葉に、末永コーチだけが満面の笑みを浮かべてみせた。

そうぞう
「……期待を上回ってくれるねえ、想像以上に」

だが少年はもう、振り返りもせず走り去っていく。

はい
同時に一同は、何かに気づいて背後を振り返った。

てのひら
さっきまで少年が掌を押し当てていた幹が、かすかに震える。

そして次の瞬間、大木がざざあっと津波のような音を発した。

枝一面の青葉が一枚残らず、地面に降り落ちたのだ。

山のように積もった葉に、小寺は言葉を失っている。

一人、末永だけが、少年の後ろ姿に微笑んでいた。

そしてもう一

せいれき
むか
西暦二〇二〇年の東京は、すでに六月を迎えていた。

ゆぞら
だが湿った梅雨空などどこにもなく、蒸し暑い夏日の連続である。

おんだんか
へんよう
二〇世紀末から始まった世界的温暖化によって、日本の四季も変容した。

しだい
あねったい
夏が次第に長引き、冬の厳しさが和らいでいる。亜熱帯に近い気候なのだ。

まち
けんさい
東京の町並みも様変わりしたが、古い家々が残る下町も健在である。

上野公園にほど近い根津と呼ばれる一角も、古き東京の姿をとどめていた。

しつこく
漆黒の少年は、その根津の路地へゆっくりと駆けてきた。

ほうおうじ
第一〇〇年と言われても不思議でない家には、「鳳凰寺」の表札が掲げられている。

とうろう
なら
いた
はな
灯籠が並ぶ庭は竹林で覆われ、板張りの離れも見えた。

おそ
「くそっ…いつもより三〇分遅いぜ」

のぞ
腕時計を覗き、少年はジョギングウェアの上着を脱ぎ捨てる。

かみ

おうごん
しっこく
軽くウェイブのかかった髪は、黄金と漆黒。

染めたものではなく、自然な美しさに満ちている。

いかん
ねんれい
ふうかく
精悍な横顔からは、年齢以上の風格が漂う。

するど
そうごん
鋭さと涼やかさが入り交じった眼差しは、荘厳にすら思えた。

せん
ひらめ
その視線が突然、鋭利に閃いた。

「まさか -」

きゅうか
失った鼻筋が動く。少年の嗅覚が何かをとらえたのだ。

と思った瞬間、少年はもう庭石を三つ飛び越えていた。

またた
おも
瞬く間に靴を脱ぎ、母屋へと駆け込む。そして・・・・・・ 微笑んだ。

「ロレイン・
何してるんだ?」

「まあ、お帰りなさい」

しょう
優しい声音と共に、にこやかな微笑が振り返った。

ひとみ
瞳は、青く澄みきったコバルトブルー。

こうさい

とど
光のような光彩を放つのは、背中まで届く金髪。

高校の夏用制服の上にエプロンを着た少女は、不思議そうに少年を見上げた。

「今朝はずいぶん遅かったのね。早くしないと学校遅れちゃうわよ」

ロレインと呼ばれた少女は、テーブルの上でサンドイッチを切り分けている。

りゅうちょう
流暢な日本語だが、この屋敷には不似合いな外国人少女だ。

べんとうばこ
少年は弁当箱に詰め込まれたサンドイッチを見て、微笑を引きつらせた。

「あ、あれ・・・・・・約束しなかったっけ? 俺の弁当は俺が作るって

「だって今朝はいつまで待っても帰って来ないんですもの。だから私、はりきって二人分

作ってみたのよ。ねえ、味見してみてくれる?」

「ああ、勿論だ・・・相変わらずうまそうじゃないか」

あま
やけに甘くなった声で、少年は差し出されたサンドイッチを口にした。

しゅんかん
ひび
瞬間、ぱりっという音が口中で響く。続けて広がったのは得も言われぬ味覚。

それでも少年の微笑は、崩れなかった。

とくせい
「た、確かに特製だ。めまいがするほどうまいぜ。で、中身は何だい?」

「あんこと・・・・・・たくあんよ。それからマヨネーズも入れてあるんだから」

からだ
ようやく、少年の身体がぐらついた。

見た目は完璧だが、味覚と胃袋は激しく抵抗している。

だがロレインはにっこりと笑い、少年に顔を近づけた。

「ね、好きな物ばかりで美味しいでしょ。自信作なのよ」

「さ、さすがだぜ、ロレイン。やっぱりお前の料理センスって天才だよ」

「本当? わあ、良かったあ!」

うで
エプロンをした少女は、細い腕でぎゅっと少年に抱きついた。

なると
そして子犬のように、少年の胸元に鼻をこすりつけてくる。

ほうこう ただよ
髪から甘い芳香を漂わせ、ロレインは少年に微笑みかけた。

この笑顔に本当の事は言えない。だが・

「だったらもうひとつどうぞ。ほら、食べさせてあげるう」

こうげき
天使のような微笑みで、ロレインは少年の口に第二次攻撃を詰め込んだ。

もんぜつ
少年は味覚どころか思考まで破壊され、胃袋もねじれるほどに悶絶する。

そこでようやくロレインも、少年のわずかな変調に気がついた。

「どうしたの、もしかしておいしくなかった?」

とうとう
ひとみ
今度は唐突に、ロレインの瞳が不安げに混み始めた。

青い瞳が水面のように輝き、さざ波が広がっていく。

のど
少年は慌てて、くわえたサンドイッチを喉に押し込んだ。

「そ……そんな事ないぜ。もっと食いたいぐらいだ」

「でもなんだか顔が青いわ。ねえ、おいしくないなら正直に言って」

「信じろよ。俺がロレインに嘘つけるわけないだろ」

يدي
すると、金髪の少女はにこりと笑みを取り戻した。

えんりょ
「よかった。いつも大ちゃん、お弁当作らなくていいって遠慮するんだもの」

大ちゃん。それは少女だけが呼ぶ彼の名前だった。

もう一〇年以上、そう呼ばれる生活が続いている。

成長するにつれ、気恥ずかしさが増す呼び名だが抵抗はできない。

おきな
ロレインにとって少年は、いつまでたっても幼い頃の・・・
・・・・・・

「ねえ大ちゃん、このサンドイッチ、お祖父ちゃんにも残しておいてね」

おっとりと告げるロレインの横で、少年は高校の制服をまとった。

時計が七時半を回ったのに気づき、少年はロレインの腕を取って庭へ出た。

もたもたするロレインを引っ張り、少年は板張りの離れへ叫んだ。

「爺ちゃん、行ってくるぜ! 台所にサンドイッチがあるからな!」

「おおう、気をつけろよお」

がた
姿は見えない。だが老人とも思えぬ野太い声が返ってくる。

「ロレインのサンドイッチは、全部お前のものだ。残しておいてやるって」

ろうかい
した
少年は、老獪なセリフに舌打ちした。

「自分だけは長生きするつもりかよ……暇だったらたまにはメシ作れ!」

「まあ、大ちゃん。やっぱり私の朝食じゃ不満なの?」

「い、いや、そうじゃないよ……とにかく行くぞ、ほら!」

お祖父ちゃん、行ってきまーす。

かれん
二人の足音と共に、ロレインの可憐な声が遠のいていく。

せいじく
りょうふう
静寂を取り戻した屋敷に涼風が鳴り、竹林がざわめいた。

その緑の中に鎮座するように、古びた道場がある。

しわぶか
きゆう
短く刈り込んだ白髪頭と深い呼吸は、確かに八〇代の老人のものだ。

だが着流し姿で背を向けていても、肩は瘤のように盛り上がっている。

にくあつ
こぶしさかずき にぎ
肉厚な身体には精気が満ち、潰れて変形した拳を握りしめていた。

「いつまでたってもガキだぜ、あいつは」

清酒を口に運ぶと、老人は初夏の青空を見上げた。

「いつまでもガキじゃあいられねえのに」

さけくさ
眠るように目を閉じると、老人は酒臭い息を吐く。

あと
厳のような老人の顔には、無数の傷痕が走っている。

ほうごう
まるで縫合されたかのようだが、眠る顔は安らかだ。しかし……

「帰りな。誰だか知らねえが」

不意に老人は、静けさの中に呼びかけた。

らくいんきょ
めんどう
「俺はただの楽隠居だ。面倒な話は聞きたくねえな」

ひとか
辺りに人影はない。気配すらも感じられなかった。

ぎょうし
だが老人は右目だけを開き、竹林の奥を透かすように凝視する。

あらわ
すると足音も立てず、すらりとした長身の女が現れたではないか。

いつきい
かんそう
アクセサリは一切身につけず、無味乾燥なダークスーツを着込んでいる。

この暑さの中で上着も着たままだが、見事な肢体は隠せはしなかった。

なると
豊かな胸元からくびれた腰へのラインは、長い脚とも相まって理想的だ。

くろかみ
波打つ黒髪をなびかせる様は威風堂々とし、瞳には知性が輝いていた。

「・・・・・・鳳凰寺無頼さんですね?」

しょう
縁側に回った女は微笑を保ったまま、老人……鳳凰寺無頼の前に立った。

「私の名前は……」

「名乗らなくてもいいぜ。だから帰りな」

はし
無頼は目したまま、今度は皿に並んだたくあんを箸でつまみだした。

やつかい
「俺は盛りを過ぎた爺いだ。厄介な物を抱えた女と、する話なんかねえな」

あや
「厄介? いえ、私は別に怪しい者では……」

ぶつそう
ふところ
「ほお、物騒な世になったもんだな。懐にそれを隠しといて怪しくねえとは」

とたん
す
途端に、女はぎくりと背筋を凍らせた。目を閉じていてなぜそうと分かる?

すると無頼老人は、おかしそうに顔を歪めた。

あしもと
「地面に落ちた竹の葉ってのは踏めば必ず音がする。あんたの足下がそうだった。だがあんたは足音ひとつ立てずに近づいてきた。危ねえぜ」

そして女もようやく気づいた。

老人は寝ころんだままだが、すでに間合いを張り巡らせていたのだ。

ぶじゅつか
しかも武術家特有のたぎるように熱い間合いではない。

むぞうさ
てんかい
ただぽんと無造作に、静寂な結界を展開しているのだ。

ようい
実戦に身を置いた者でなければ、容易には気づかないだろう。

老獪すぎる。女はその間合いだけで、老人の力量を理解した。

…………誘ってるのね」

急に、女の声音に冷たいものが込められた。

化けの皮を ずるりと引き剥がす。それでも老人は、たくあんをつまんでいた。

「ふっ……!」

短い呼吸を吐き、女は胸元に右手を突っ込んだ。

しゅんか

じゅうこう
ひたい
と見えた次の瞬間、ベレッタM九二の黒い銃口を無頼の額に突きつける。

正確無比な狙い。補業めいた抜き打ちが、瞬時に老人を居らんとした。が……

なさ
「やっぱりだ。俺は情けないぜ」

おのれ
ため息を吐き、無頼は己を哀れんだ。

「やっぱり俺は盛りを過ぎてる」

きょうがく
けんじゅう
女は驚愕したまま、拳銃をぶるぶると震わせていた。

はき
ベレッタを押さえつけたのは、さっきまでたくあんを挟んでいた箸ではないか。

間近にいながら、女にはその動きすら見えてはいなかった。

ふう
無頼は、箸だけで拳銃のスライドを封じている。引き金は微動だにしなかった。

わか
「これで盛りを過ぎてるなら、若い頃はいったい……」

顔に血を昇らせた女に、無頼はようやくまぶたを開いた。

「さあな。もう昔の事だ、忘れたぜ」

さと
無力を悟り、女がベレッタから力を抜くと、無頼も箸を離した。

みぶんしょう ていじ
拳銃を胸元にしまった女は、観念したように身分証を提示する。

こみずれ
ちょうこくさいはんざ
「迫水玲子。警視庁国際犯罪部の警部補です」

さくらだもん
きょう
「ほお、桜田門か。若いのにいい度胸だぜ」

かくとう
ほんしょう
ていど
玲子の動きも格闘技に通じた者のそれだ。本性を隠す程度の知性もある。

ゆうのう
そうさ
がんこうするど
だがただの有能な捜査官ではない。そう思わせるほどに眼光が鋭さを増している。

じょう
無頼老人もそんな玲子の素性に感づいたのか、薄ら笑いを浮かべ始めた。

おそ
「最近の警察はいきなり抜くのかよ。恐ろしいな」

ひど
「誘ったのはあなたでしょう。酷い楽隠居だわ」

「分かってて応じたんだ。お前さんも酷い女だ」

くえない奴と玲子は腹の底でほぞを噛んだろう。

たちの悪そうな老人は、あぐらをかいて迫水玲子を招き寄せた。

いっぱい
「まあいい、座りな。今、一杯出すから」

じょうだん
きんむ
ことわ
「冗談！勤務中です。勤務外でもお断りしたいわ」

玲子の言葉を、無頼は何々と笑い飛ばすだけだ。

えんがわ
それでも縁側に座った玲子は、ただ者とは思えぬ老人に居住まいを正した。

しょうけん
たいが
「用件を申し上げます。あなたのお孫さん・・・・・・ 鳳凰寺大くんの事で来たんです」

その名に、無頼老人は首を傾げた。

「大牙なら高校だよ。今出てったばかりだから、追いかければ会える」

「まず確かめたい事があるんです。彼の成長について」

「ふうむ。俺はまた例の件で大牙をしょっぴきに来たのかと思ったが」

「どういう意味です? 彼 まさか犯罪を……」

だがその問いに、老人は答えない。

無頼は、ぼりぼりとたくあんを噛み砕きながら、日本酒を口に運んだ。

「あいつは十分、成長してるぜ。身長は一八五……ありゃあまだ伸びるな」

「そういう意味じゃありません」

ちゅうこく
「だったら男として成長したかって事か。なら忠告するぜ」

الدهون
しめ
無頼は急に野車な視線で、玲子の胸元を箸で指し示した。

ちが
かっこう
おそ
「俺の孫は、違う意味でサカリがついてる年頃だ。そんな格好で会ったら襲われるぜ」

言われて、玲子は白いブラウスを見下ろした。

そのボタンがいつの間にか、上から下まで引きちぎられている。

り
ゆた
ね
放に開け放たれたの間からは、豊かな胸を包む白い下着が丸見えだった。

「い、いつの間にいいいっっ!」

ぜつきょう
あしもと
絶叫した玲子は上着でそれを隠し、今頃無頼の足下に気づいた。

たくあんが載っていた皿には、ボタンが整然と並べられている。

ベレッタを防ぐ前に引きちぎったというのか。

ようやく玲子は、げらげら笑う老人の底知れぬ力に気がついた。

「あ、あなたは……」

ひとすじなわ
「だから言っただろう、玲子。一筋縄でいく人物ではないと……」

玲子を遮ったのは、新たな男の声だった。

やはり音もなく竹の葉を踏みしだくと、縁側へと静かに歩み寄る。

そんざい
すでに彼の存在も悟っていた無頼は、つまらなそうに酒を干した。

「相変わらず無粋だな。俺はもう少し、この姉ちゃんと遊びたかったのに」

「私が日本に来た以上、何を確かめるかはお分かりのはず」

男は、無頼の言を無視して一礼した。

ひき
ミスター・ブライ
「お久しぶりです、無頼氏・・・
マスター・ブライ
いや、無頼師範」

再び、風が鳴った。

真っ赤な闇があると、少年は知っていた。

のが
逃れることはできず、目をつぶってもなぜか見える。

せんけつ
一面鮮血を撒いたような世界で、少年は逃げ惑った。

だがいくら駆けても、立っている場所に変化はない。

せなか
そして背中に呼びかける声も、決して消えないのだ。

『大牙……大牙 J

やき
優しい女の声である。

しかし少年は、一度もその声に振り向いた事がない。

そ
なぜか恐ろしい声に思える。

耳を塞いでも、鼓膜の奥に彼の名前はこびりついた。

『大牙……大牙……』

いつものように身体を丸め、じっと耐えるしかない。

きょうふ
恐怖が行き過ぎるのを。自分を許してくれるのを。

だが今日はいつもより、声は間近に聞こえていた。

「大牙くん… 鳳凰寺大牙くん……」

「う……ううつ

「ちょっと大牙くん、起きなさいよ」

「うあああああっっ!」

か
しゅんかん
肩に手が置かれた瞬間、鳳凰寺大牙は悪夢から醒めた。

そして周囲を見回す。見慣れた教室とクラスメイト。

もうはつ
大牙は大きく息を吐き、金と黒の毛髪を掻き上げた。

「……なんだ、先生かよ」

じゅぎょう
「なんだじゃありません。また私の授業で寝てたわね！」

まだ二〇代半ばの英語教師は、教科書で大牙の肩をこづいた。

「あなた目立つから、寝ててもすぐに分かるのよ」

ぶあつ
確かに、教室の一番後ろに座る長身は、他の生徒に比べて分厚く見える。

かも
ふんいきじんじょう
さらに全身から醸し出す雰囲気が尋常ではない。鋭利な刃物を思わせる。

大牙を嘲笑う級友がいないのも、彼の底知れぬ雰囲気のせいだ。

たいど
はんこう
しかし態度は悪くても、担任教師は大牙に反抗された覚えはない。

いじょう
たた
だからこそ愛情を込めて、もう一度肩を叩いてやった。

たく
「学校行事も欠席多いし、帰宅部なんだから、せめて授業ぐらい聞きなさい」

「んん……そうするよ」

うやむやな返事をするうち、チャイムが鳴る。

金曜日。最後の授業が終わりを告げると、大牙は冷や汗を拭った。

どれだけ暑い日に走り込んでもかかない汗だ。

ひど

一〇日に一度。酷い時には三日に一度の割で悪夢を見る。

それも物心ついた時からだ。見なくなった時期などない。

今朝のように、腕に覚えのある奴らに囲まれても恐怖は感じない。

しかしこの悪夢だけは別だった。いつまでたっても慣れないのだ。

28
「ったく…………..なんだってこんな夢を……」

たく
まど
クラスメイトが帰り支度をする中、大牙は気分を変えようと窓の外を眺めた。

じんぐう
がいえん そつ
大牙が通う私立神宮学園高校はその名の通り都心、神宮外苑に接している。

しんじゅく
しぶや
みなと
新宿区・渋谷区・港区が接するこの近辺は、緑地とスポーツ施設が多かった。

ほんかがい
それでいて繁華街も近い。神宮学園は、まさに東京の中央に位置しているのだ。

いくえん
保育園から大学まであり、大牙も小学校からエスカレーター式に高校まで移った。
うつ

かくべ
けいじゅつ
と言って格別、進学校ではない。むしろスポーツや芸術教育に力を入れていた。

ふつう
ほか
大牙は普通科二年だが、他にも様々なコースがあることで知られ、人気も高い。

その校庭を見下ろす大牙に、一人の級友が声をかけた。

けん

「ところで大牙、お前がサッカー部に入る件だけどな」

ことわ
「ちょっと待て。その話なら、俺、断ったじゃねえか」

を曇らせた大牙を、級友はあえて無視した。

みちび
「いいや、お前は我がサッカー部に入るんだ。そして俺たちを全国大会に導くんだ。さら

うしょう
に言えば全国優勝して、俺たち部員の顔をテレビに映して欲しい」

「他力本願かよ。そんな頼りないサッカー部があるか」

さそ
「あるからお前を誘ってるんだ。お前が入ってくれるように、今や部員一同、手をつないでお百度踏みまくってるところだ」

「手をつなぐ前にボールを蹴れ、ボールを」

頭を抱えた大牙に、サッカー部員は首を横に振った。

「そもそもお前が普通科にいるのが変なのだ。なぜスポーツ科に入らない?」

ぎもん
その疑問は、クラスメイトどころか学校中が抱えているものだった。

大牙は一〇〇メートルを九秒台で走り、自由形なら五o秒以下で泳いでしまう。

スポーツ科の生徒でもかなう者などいなかった。

だがもっと不可思議なのは、誰が見ても大牙が本気でないところである。

何気ない顔で、世界記録を叩き出しているのだ。

すす
かんゆう
当然教師らはスポーツ科への転科を勧め、スカウトの勧誘も数知れない。